

ジャワ島中部地震被災者支援活動報告書

2006年10月31日

特定非営利活動法人 APEX

1. 地震の発生と被害状況、募金の開始

2006年5月27日（土曜日）現地時間午前5時54分、ジャワ島中部ジョグジャカルタ市の南南東約10キロ、深さ約10キロ（5月31日、防災科学技術研究所発表）でマグニチュード6.3の地震が発生しました。被害は、ジョグジャカルタ特別州南部のバントウル県、中部ジャワ州のクラテン県を中心に広範囲に広がり、死者5700名以上、倒壊家屋約52万軒にものぼる大惨事となりました。その被害状況の概要は図1のとおりです。

APEXは緊急支援活動の経験は浅いのですが、ジョグジャカルタはAPEXの主要な活動拠点であり、長年の協力関係にあるジョグジャカルタの現地NGO、ディアン・デサ財団がいち早く被災者救援活動を始めたことから、地震発生二日後の5月29日より被災者を支援するための募金を開始しました。そのすぐあとで日本国際ボランティアセンターがこの募金に賛同・協力して下さることとなり、支援が次第に本格化していきました。

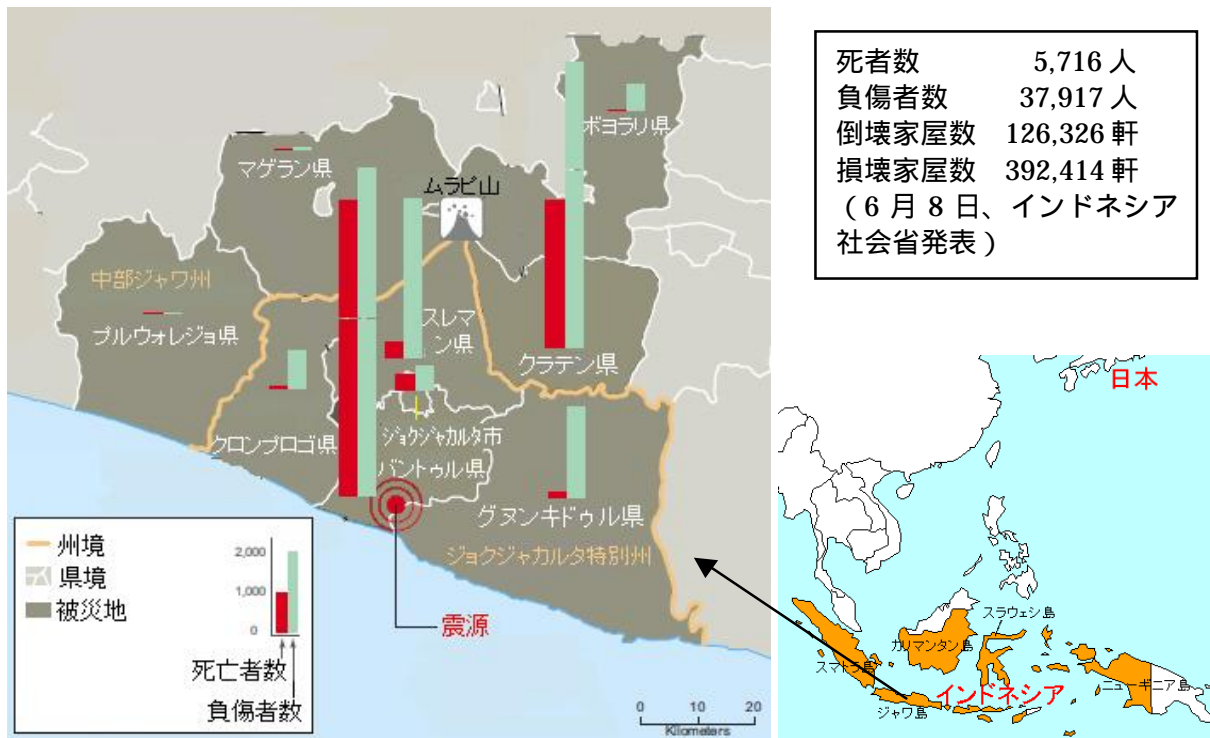


図1.ジャワ島中部地震による被災状況（国連人道問題調整事務所レポートより）



図2.被災地の状況

2. ディアン・デサ財団の緊急支援活動（5月29日～6月6日）

地震の発生直後は、まず食糧、飲料水、テント、衣料、医療品等の、当座の基本的ニーズを充たす物資を被災者に迅速に配布することが何よりも重要です。ディアン・デサ財団では、地震発生直後の5月29日から6月6日まで、被災地を回って食糧・水・テントなどの緊急援助物資の配布を行いました。この期間に配布した物資と配布先は下記の表のとおりです。あとで述べますように、APEX/JVCからの義捐金は、ディアン・デサ財団の救援活動全体に要した金額の中では決して大きくはないのですが、迅速に募金し、送金することができたため、まずはこの段階の資金すべてをまかなうこととなりました。



図 3.ミネラルウォーター、ソバ、生理用品を積んで現地へ



図 4.衣料品の仕分けをするスタッフ

ディアン・デサ財団が配布した支援物資一覧(5月29日～6月6日)

	バントゥル 県	スレマン 県	ジョクジャ カルタ市	グヌングキ ドゥル県	クロンプロ ゴ県	クラテン県	合計
支援した村数	27	16	13	10	3	13	82
ミネラルウォーター (箱)※1	111	61	80	5	0	9	266
米 (kg)	11650	4575	2575	775	302	1426	21303
インスタントラーメン (箱)※2	277	135	51	18	2	45	528
乳児用ミルク (箱)	985	399	288	60	15	78	1825
子供用ミルク (箱)	134	89	38	15	5	19	300
ベビーフード (箱)	628	252	203	57	12	74	1226
砂糖 (kg)	1096	650	253	60	21	74	2154
塩 (袋)	405	250	95	35	10	65	860
調理用油 (リットル)	220	56	48	16	7	17	364
イワシの缶詰 (缶)	529	350	184	20	5	66	1154
ビスケット (袋)	104	34	247	6	1	7	399
テント (枚)	276	124	46	14	0	31	491
毛布 (枚)	1413	755	241	65	30	150	2654
包帯 (リットル)	2246	1270	267	45	123	252	4203
衛生キット (個)	413	200	102	15	5	38	773
薬品セット (セット)	141	21	29	10	0	28	229
衣服(成人) (リットル)	242	79	24	15	0	32	392
衣服(子供、乳児) (リットル)	83	31	13	5	4	11	147
非常用ランプ (ケ)	99	19	10	6	1	15	150
懐中電灯 (ケ)	85	35	14	10	3	5	152

※1 250ml×48ケ入り

※2 40食入り

3. ディアン・デサ財団の復興支援活動（6月7日～）

インドネシア政府や国際援助機関の援助物資が流通するようになってきたのを見て、ディアン・デサ財団では緊急支援物資の配布は6月6日までで切り上げ、6月7日からは復興支援へと活動を切り替えました。被災者が安全な水を得られず、不衛生な環境におかれていると、胃腸疾患や伝染病の蔓延につながり、また精神的に大きな負担を与えることにもなります。水供給・衛生改善は、ディアン・デサ財団のもっとも得意とする分野でもあり、復興支援として、ディアン・デサではこの分野の活動に多面的

に取り組んでいきます。

3-1. MCK(トイレと水浴び場と洗濯場の複合施設)の設置

復興支援に入ってから、MCK(Mandi Cuci Kakus、トイレと水浴び場と洗濯場の複合施設)の建設が中心的な活動となりますが、6月には、第1段階のMCKとして、トイレ5室、水浴び場4室、洗濯場1室からなるものを、パントゥル県やプランバナナ郡(スレマン県)に計120ユニット設置しました。50-70家族程度の集落に1ユニットのMCKを設置する要領です。この第一段階のものは腐敗槽などの地下部分は長く使えるものの、壁や屋根など地上部分は数ヶ月程度しか持たない仮設的なものです。



図5. 第1段階として建設した10部屋からなる仮設MCK(左から建設中、完成したもの、MCK内部)

7月以降は、同じつくるのであれば長く使えるものがあると、半恒久的なMCKの建設を始めました。1部屋当たりのコストも約3万円とあまり変わりません。半恒久的なMCKは1ユニット二部屋のみで、それぞれの部屋がトイレ、水浴び、洗濯に兼用できます。住居に隣接して作り、当面は約7家族に共同で使ってもらいますが、住宅の復興が進み平常化すれば、いずれかの家族にそのまま使ってもらうこととなります。このため、住民との話し合いに時間をかけて、設置場所に関して十分な合意を得てからつくるようにしています。

半恒久的MCKは、下部構造はセプティックタンク(腐敗槽)、コンクリート打ちの水場とやはりコンクリート製の50cmほどの高さの壁を一体化して作り、その上部にトタン板の壁と同じくトタン板の屋根を備えたものです。5人で5日間作業すると出来上がります。地域の人をディアン・デサが雇用する形で仕事を進め、その賃金(1日あたり20,000~40,000ルピア、約270~530円)で住民を支援することもはかっています。



図6. 2部屋からなる半恒久的MCK(左から建設中、完成したもの、MCK内部)

10月16日現在、半恒久的MCKは既に完成したものと現在工事中のものとを合わせると918ユニット(約6,400世帯分)になります。また、10室からなる仮設MCK(120ユニット)は被災者が元々住んでいた住宅の近くにあるものは、住民からの要望により半恒久的なものに改造しています。

3-2. 井戸の修復

今回の地震により、井戸も大きな被害を受けています。瓦礫が入ってしまったり、泥が湧き出したり、枯れてしまったりと被害の様相も程度もさまざまです。ディアン・デサ財団では、パントゥル県とスレマン県の6つの地域の井戸を修復する作業にとりかかりました。事前調査の結果、被害の程度で分類すると、軽微なもの40%、中間的なもの30%、深刻なもの30%といった割合で、それぞれ4600円、1万

円、2万5千円ほどの修復費がかかります。

井戸の修復は、まず井戸の中の泥や瓦礫を取り除いて掃除した後、支柱や排水溝などを整備（改修）する、という2段階で行っています。後者は、資材をディアン・デサ財団が提供し、同財団の技術指導の下、住民自身が工事を行うという形をとっています。



図7. 井戸の修復の様子
(左からポンプで泥を吸い出しているところ、吐き出された泥水、支柱や排水溝の整備)

10月16日時点で、3,981本の井戸の掃除が終了し、そのうち約1,900本が改修まで終わっています。現在取り掛かっている井戸が改修まで終われば、井戸の修復活動は終了する予定です。

3-3. 浄水の供給

カナダの援助団体から浄水装置(マイクロフィルターと活性炭処理と紫外線滅菌を組み合わせたもの)の支給を受け、それをを用いて一日45トン程度の井戸水を浄化して、飲料水用として配給する活動を6月7日から10月15日までの約4ヶ月間行いました。そのうち4割程度はムラピ山の火砕流による被災地向け、残りの6割は地震の被災地向けです。浄化した水は5トン単位で大きなプラスチックバッグに入れて運び、受け入れ先の村に同じく5トンのプラスチックバッグを設置して、二日毎に補充するという要領でおこなわれました。各村に設置された供水システムは電力のいらない重力を利用したシステムで、近隣の住民に無料で安全な飲み水を供給しました。



図8. 浄水の供給の様子
(左から浄化した水をバッグに入れているところ、バッグの設置作業、水を汲みに来た住民)

3-4. 住宅支援

被災地では本格的な住宅復興にはいまだ手がつかず、かといってテント暮らしにも限界があって、手に入る材料で仮設的な住まいをとにもかくにも建てて当座をしのごうとしています。その「当座の住まい」にはかなり幅があって、テントのバリエーションといえるものから、恒久でないにしても相当期間にわたって住めそうなものまであります。木や竹で枠組みを組んで、グデッキという竹で編んだ壁材を貼り付けたり、廃材やビニールシートで壁を塞いだりしています。

10月4日になってようやく、インドネシア政府から1500万ルピア/世帯程度の住宅復興手当てが支給されはじまりましたが、



図9. 親戚の援助で建てたという仮設住宅(パントウル県、7月21日)

グループ形成上の課題や技術面の調整役不足などまだまだ問題も多く残されているようです。

ディアン・デサ財団では地震で障害者となった住民向けの住宅復興支援のため、15軒の住居を試験的に建設します(10月16日現在)。100軒分までは予算も取れているとのこと。インドネシアは間もなく雨季を迎えるため、早急な対応が必要となっています。



図 10. 防水シートの小屋で暮らす女性(バントウル県、9月13日)

4. 収支報告

みなさんからいただいた義捐金は、9月5日現在で14,513,123円に達しました(うち、日本国際ボランティアセンターを通じた募金:11,416,650円)。その用途は下のとおりです。

また、ディアン・デサ財団では、APEX/JVC以外に、ユニセフ、USAIDなど多くの援助機関、助成団体より資金を得て活動を行っており、その全体の予算の中でのAPEX/JVCの割合を図11に示しました。同財団では、この他にも、ケア・インターナショナル等、他の団体の救援活動に協力しています。

収入：14,513,123円

支出：ディアン・デサ財団の支援活動費

緊急支援物資の調達・配布	3,628,986円
復興支援 半恒久的MCKの設置 計163ユニット	9,870,241円
復興支援 井戸の修復 計442本	
オペレーションコスト(ディアン・デサ財団)	288,240円
APEXの管理費(現地視察、報告書作製など)	725,656円

支出合計

14,513,123円

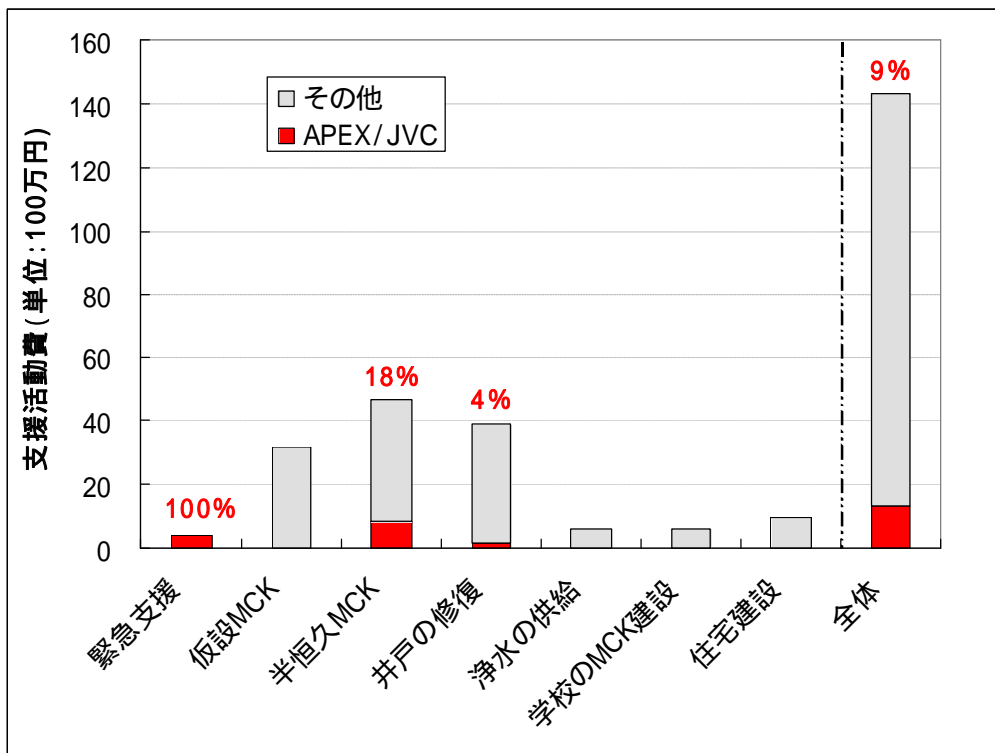


図 11. ディアン・デサ財団の被災者支援活動費と APEX/JVC の支援金の割合

5.まとめ

インドネシアではまもなく雨季が始まる時期ともなり、住宅復興の遅れが心配されます。住民の生活が元に戻るまでには、まだ時間がかかりそうですが、APEX/JVCの支援は、まず緊急支援として、ついで本格的復興にいたるまでの過渡期を形成する活動を支援するものとして生かされ、一定の意義があったといえます。インドネシア人特有のおおらかさ・楽天性からか、被災者の方々と話をしても、悲観的なものは感じられず、きっと立ち直ってくれるだろうという気持ちにさせられます。ディアン・デサ財団の活動の迅速さ、組織力、機動力、活動の的確さにはおどろかされ、またこれだけ重要な活動を担いながら、少しも気負うところがなく、いつもと変わらぬ明るさできつい仕事もやってのけるスタッフやボランティアには心から拍手を送りたい気持ちになります。彼らを支援できたことは私たちの誇りです。みなさまの暖かいご支援に心から感謝いたします。

以 上